

## □5月5日礼拝説教(短縮版)「霊のとりなし」

ローマ8:26～30 隅野徹牧師

今回の中心は28節ですが、私は後半の「わたしたちは知っています」という言葉が理解のキーになると考えます。「わたしたち」とは「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たち」を指すのだと伝統的に理解されてきました。今日はあまり深く見ませんが続く29節や30節には、神が前もって召しだそうと定められた者があること、つまり神が特別に一方的な憐れみによって選ばれた者を義とし、特別に栄光を与えることが教えられています。

このことから分かるように「神を愛する者たち」とは「万事が益となるよう、すべてが共に働くことを知っている者たち」なのであり、それがパウロやローマの信徒たちを含むわたしたちなのです。28節だけを切り取って、万事が益となるというような人生訓として読み取ってしまいそうになりますが、29～30節より、神の特別な憐れみによる選びを確かに受け取って、その約束に生きる者の人生について語られていることがお分かりいただけるのではないのでしょうか。

神を愛する者とは…愛される資格のない罪人である自分を神が愛して下さり、キリストの十字架の死と復活によって罪を赦して下さった。義とされ、将来、天において栄光をいただけることを、感謝して生きる者なのです。

神の救いの恵みに感謝すること抜きに、苦しい出来事が役立って、自分の願い事が叶えられるのを期待することが語られているのでは決してありません。神を愛するわたしたちが求める「益」とは、自分の願望ではありません。私たちの願いや望みは実現しないかもしれない…それでも神のみ心が全てのことに於いて実現する！それこそが本当の益なのだということを心に留めましょう。(終)